ユダス・マカベウスの叛亂

水川　溫　二

一

猶太のマカベウス時代は、後の西洋文明の二大要素を成すユダイズムとヘレニズムの相結び合ふ時期として世界史上重大な意義を有するものであるが、此時期の中心的事件であるマカベウスの叛亂に就いて一般の學者は其發端からハスモネア王朝の樹立までを一貫する單純一途の發展を示すものゝ如く解して居るが、之は當を得た説明では無いと思ふ。

或は之を單なる民族獨立の運動とし、或は社會革命とし、或はマカベウス家の政治的野望達成の爲の鬪爭なりとする。其孰れも偏見たるを免れない。叛亂の始めには異國の支配を排擊して自治國家を創建せんとする如き意圖は現はれてゐない。又叛亂前の社會狀態もハスモネア家治下の社會狀態も略々相似た情弊に滿ちてゐる。更にマカベウス家の野心に就いて言へば田舍祭司たるマカベウス家の人々が始めより政治的大望を抱く程の實力も信望も博し得る譯は無く、斯る大望を起すに至る爲には寧ろ四圍の事情の新たなる變化が無ければならない。此點に就て、ユダス・マカベウス Judas Maccabaeus

の叛亂が始め宗教鬪爭と政治運動の合流として發展し、後兩者の利害相容れざるに及んで分裂したと見る說もあるが、之も甚だ矛盾に富む見解なる事は、後章自ら明かとなり得ると信ずる。

或一貫した主義主張に動く運動の單純な發展を可能ならしむべく、此時代は餘りにも複雜な相貌を示して居るのであつて、そこに吾人は異邦文化に接した猶太人世界の變革期の動きを認むべきであらう。

本論は、ユダスの死に至る迄のマカベウス叛亂の性質と成敗の由りて來る所以を考察し、夫が決して一個人の野心に始められたものではなくして、寧ろ宗教的信念に立脚する大衆社會改革の共同運動であり、之がユダスの統率者としての才幹によつて成果を得る一方、其の成功は敗因を招來する基ともなつた事を明かにし、且つ、ユダスの叛亂其自身は一旦終局を告げて居り乍ら、夫が後期の叛亂に對し如何なる意義を齎らし如何なる關係に立つかを論じて見やうと思ふ。

二

叛亂を誘發せしめた政治・社會・宗教的諸原因に就いては、到底縷述の遑なきを以て、茲には唯後の論述に關係する限りに於て其顯著なる事實を概觀するに留める。

紀元前三世紀の後半から、猶太はヘレニズムの影響を蒙つて、社會・經濟・宗教思想の上に急激な變化が起つてゐた。そして猶太人の間にはヘレニズムの感化を甘受せんとする進步派と、ヘレニズムを

以て異邦人の文化なりとして排斥する保守派とが大別された。當時漸く自然經濟の域を脱して、聖都イエルザレムを中心市場として內地の農產物及び奥地アラビアの商品を以て地中海々岸の希臘人都市と活潑なる取引を始めつゝあつた猶太人にとつては、ヘレニズムを嫌忌して異邦人に親しまぬ事は猶太をして世界經濟の國際競爭場裡に落伍せしむる事であり、民族的存立を危ふくする事であつた。此情勢はイエルザレムの貴族階級・智識階級の間には夙に覺知された所であり、旁々異邦人の國々に住む散住ユダヤ人の感化を通して、ヘレニズム迎合の氣運は早くより動いてゐた。

此氣運を促進したものは、紀元前一九七年のセレウコス家シリアの猶太領有であつた。一體埃及のプトレマイオス家の重商主義は、自然植民政策を採り領土內の文化的建設に意を用ふる事少なく、物資を徵集してアレクサンドリアに蓄積し、宮廷の富を增して首都の施設を盛んにするに急であつたが故に、猶太に對してもヘレニズム文化の積極的扶植を試みる事はなかつた。之に對して、アレクサンドロス大王の理想主義に最も忠實であるシリア王國の政策は、領內に於ける希臘的文物の普及と、希臘的都市の建設に熱心であり、希臘的都市に對しては特に政治上・經濟上の特權を賦與して之を保護する風があつたが故に、猶太の支配階級も自國がシリアの統治下に歸屬した以上は進んでヘレニズム的制度習慣を採用して、文化的地位の向上を計らざるを得なかつたのである。マカベウス第壹書にアンティオコス・エピファネス（四世）Antiochos Epiphanes 治世初頭の猶太の有樣を錄して、『此頃イスラ

エルの民の間に、律法を無視する者が現はれて、人々に「往きて我等の周圍なる異邦人と交らう。何故ならば、我々は彼等から離れて居るが故に、我等の上に多くの不幸が降るのであるから。」と勸め始めた。此言葉は聽く者の耳に道理と聞えた。そして或人々は斯く爲さんと決心して、國王の許に行き異邦人の慣習に從ふ許可を得て、イェルザレムに異邦人の制度による競技場を造つた。』(一章一一—一五)と言つて居り、マカベウス第二書によれば、時の祭司長ヤソン Jason は王に銀百五十タレントを獻じてイェルザレムに於ける競技場建設權及びイェルザレム市民に對するアンティオキア(同等の)市民權賦與の特許を得、良家の子弟には希臘風の帽子を著用せしめ、祭司等までも、『最早祭壇の勤行に對する熱心を缺き、聖所を輕んじ、獻祭を怠り、演技場へ走り、圓盤投に與じた。』(マカベウス第弍書、四章、一四)其狂態は我が明治初年の西洋文物の流行を想はせるものがある。

斯る社會的改革が多くの財源を必要とする事は言ふ迄も無き事であつて、豐富なる寺領の收益と全世界猶太人の獻金とによつて鉅萬の富を藏するイェルザレムの神殿と之が管理者たる祭司長の地位とは、改革派の垂涎の的となつた事は當然であつた。當時既に氏族制度の遺習としてのアアロン Aaron 家の祭司長職世襲の慣例も同家の血統の紊るゝと共に漸次輕視さるゝ傾があつたが故に、(註一)一七五年頃祭司長オニアス Onias は、弟ヤソンの爲に廢せられたが、其際ヤソンが此簒位默許の代償として王アンティオコス四世に獻じた銀は四百四十タレントと傳へられて居る。祭司長職の地位が如何に收入多

きものであるかを物語つてゐる。又オニアスは、敬虔な聖徒であつたと傳へられて居るが、(註二)進歩的な改革派にとつては斯る保守的な退嬰的な祭司長の存在は堪へ難きものであつたらう。ヤソンは其後一七二年、卽ちユダス叛起の五年前、更にトビア Tobiah 家のメネラオス Menelaos の爲に其職を奪はれるが、トビア家は元來猶太人からは蔑視されて居たアンモン族 Ammonites 出身の成上り者で、第三世紀の末其一族のヨゼフ Joseph (註三) なる者の時代から猶太史上に現はれて居り、恐らくはヨルダン河東部の土豪として、アラビア人との通商に巨利を占め、新興ブルジョアとしてイェルザレムに移り住んだ者である。(註四) 斯る新しき家柄の擡頭にも當時の社會的經濟的變革の跡を見る事が出來る。

ヘレニズム的都市經營の爲に神殿の財産すら窺はるゝ時世に當つて、農村の蒙る負擔の過重なりし事は論を俟たない。華やかな都市と疲弊せる農村の著しき對照は當時の文獻から明かに察する事を得やう。次に引用する「アリステアスの書翰」Letter of Aristeas (註五) の一節は奈邊まで當時の猶太を寫實したものなるか不明であるが、書翰著作年代に關する一般推定說から推すも、又次の一節の前後に聯關する記事から察するも、ヘレニズム時代の猶太にも妥當するものと見る事に誤り無からう。『都市は廣大で相應しき繁榮を樂しみ、人口は豐かである。然し彼等は田舍を忘れてゐる。何故ならば、人は性來快樂の追求に傾けるもので享樂の生活を懌ぶから。同じ事が總ての都市にも增して廣大で富めるアレキサンドリアにも起つてゐる。田舍の人は田園を去つて町に住み、農業を荒廢せしめる。されば王

は彼等の町に移住する事を防ぐ爲に、二十日間以上都市に留まる事を禁じた。』(一〇八節—一一〇節)

如上の都鄙生活の對照と貧富の懸隔に加へて、やがて起らんとするマカベウスの亂に一層重要な意義を持つものは宗教上の對立である。既に述べた如く祭司族の血統は紊され、祭事は廢れ、祭司の生活も腐敗せる時、イェルザレムの神殿を中心とする猶太人の信仰生活——儀式・禮拜・巡禮・獻金等——は漸次形式に墮し、人民の精神的指導には緣遠きものとなり、宗教的生命は失はれつゝあつた。都市に住む貴族的神學者は民衆生活の救濟改善を考ふるよりも寧ろ各自が其現在の分に甘んぜん事を勸戒し、一面に於て神の恩寵と攝理に畏服せん事を教へつゝ、暗に無學を侮蔑し理智を誇り、勞働を賤しとして有閑を尊んでゐる。例へば、イェズス・ベン・シラー Jesus ben Sira の集會書 Ecclesiasticus の如く、『富める者は富の蓄積の爲に働きて、其休む時は充ち滿ちたる財寶を有すれども、貧しき者は賤しき生業に汗して、末は舊の如くに貧し。(卅一章三—四)』『學者の智は働かざる時に來る。働く事少き者は智を得ん。鋤を把り家畜を追ふに忙しき者に如何なる智か養はるべき。其者は畦を掘るに意を用ひ、牛に秣するに心を奪はる。總ての職人も棟梁も亦然り。……彼等は皆己が手を賴りとし、各々その業につきて賢し。彼等なくして町は成らず。而も彼等自らは町に住まず。町を歩まず。〔町の〕集會に出席せず。(卅八章廿五—卅七)』と言ひ、更に、『聖者と犬と何の類緣かあらん。富者は貧者と何の關りあらん。驢馬は沙漠に於ける獅子の餌なり。同樣に貧者は富者に喰はる。(十三章二二—二三)』とまで極言してゐる。又、矢

張此時代のイェルザレムの神學者の作と覺しき「傳道の書 Ecclesiastes, Qoheleth.」は、『神は其心に適ふ人に智と識と悅樂を賜ふ。罪人には勞苦を與へて集め蓄ふる業をなさしむ。(二ノ二六)…愚者は勞して身を疲らし、町に入る事だに知らず。(十ノ一五)』と說く。

斯る都市的貴族的宗敎生活の無氣力と驕慢とに對して、全く反對の立場に立ち、父祖の律法の嚴守を唱ふると共に、貧窮なる者を鼓舞激勵して、窘迫の日に在つて益々强き信仰と希望を養ひ、メシアの到來に備へん事を敎ふる者は平民的神學者であり說敎者であるハシディム Hasidim, Chasidim, Hasideans, Asideans. の人々であつて、下級祭司も少なからず之に屬してゐた。彼等は內容なき典禮主義を排して、律法の敷衍解說によつて敎義の倫理的意義を强調し、民衆の日常生活を敎化善導するに努めつゝ、他面には父祖の信仰の生氣ある維持を計り、背敎的な貴族や惡德祭司に對する憎惡を抱いてゐた。彼等の思想を代表すると言はるゝエノク書 Book of Enoch は、『禍なる哉、汝富める者よそは汝、汝の富に賴ればなり。而して汝は汝の富より離れん。何となれば汝は汝の富める時に於ていと高き者を思はざりしが故に。(九十四ノ八)』『汝罪人よ、禍あれ。汝の富は汝を正しき者の如く裝へども、汝の心は汝の罪人なる事を露し、此事實は汝を裏切りて汝の惡しき行爲の想ひ出の證據となるべし。(九十六ノ四)』と言つてゐる。

斯る思想的な感化は、民衆の對立意識を養成するものであつて、都市生活に對する農民の嫉視も、

富者に對する貧民の羨望も、其他あらゆる失意者の權力者に對する憎惡も、盡く轉じて宗教的慷慨となり、ハシディム的倫理觀の富者强者への蔑視は階級的不滿を妥當化し正義化して、民衆をして彼等が眞の律法の遵奉者であり神の恩寵を浴するものなる事の自覺を强うせしめる事となつた。『彼等は互に鬪ふであらう。若きは老へる者と、老ひは若きと、貧しきは富者と、賤しきは大いなる者と、乞食は貴族と、律法と團結との爲に。』(註六)吾人はマカベウスの叛亂の性質を議論するに當つては、かく無教養な實力なき民衆を驅つて、相結んで事を起さしめた思想的根柢と、斯る思想が起り且つ受容され得た當時の社會狀態を充分理解する必要があるのである。

さて、以上述べ來つた如く、希臘文化を謳歌して其效果を享受せんとする一派、卽ち貴紳階級と、異邦的要素を嫌忌し呪咀する一派、卽ち下層民との對立が顯著となり、前者は其階級的存立擁護の爲シリア政權の實力に縋らんとし、シリアも亦都市の富豪を保護して國家の財政的窮迫を救治せんとする時、其反動として大衆が、比較的寬大なりし埃及の支配を再び迎へて事態を打開する事を望み、埃及とても勿論虎視眈々として一旦喪失せるパレスティナ一帶の經濟的軍事的地盤を挽回するの機會を窺ひ、猶太內部の情勢に乘ぜんとした事は自然の動きであらう。一六九年シリアと埃及が開戰し、シリア王アンティオコス四世が南征しつゝある間に、イェルザレムに於て激しき暴動が起つたので、シリア側では埃及派の煽動による後方攪亂策と思惟し、イェルザレムから釋明の爲ティロス Tyros に在

る王の行營に派遣されて來た長老三名(註七)を叛逆の廉で死刑に處し、更に埃及遠征の歸途、王は大軍を率ゐて聖都を寇掠し、多數良民を虐殺した。然し、此頃から猶太人の埃及の支配に對する待望も頓に失はれた樣である。

右に述ぶるイェルザレムの暴動は、マカベウス叛亂の前表とも言ふべきもので、其動機は當時メネラウスの後任として祭司長であつたその弟リジマコス Lysimachos が聖殿の神寶を賣却し、又猶ほ存命中なりし前々正統派祭司長オニアス Onias を殺害せしめた事——恐らく正統派の復位を要求する聲が高かつたのであらう——が民衆を激化せしめた爲であるが、『或は石を摑み、或は棍棒を握り、或は灰を投げて(マカベ貳書四ノ四一)』荒れ狂つた暴徒の中には、勿論單なる宗教的動機によつてのみ事を起した者以外も參加してゐたに相違ない。

人心の激化に加へて、壓迫者側は內外政情の新しい變動に困惑して益々焦燥となり、自棄的となつて、節度が失はれて來た。國內に續出する叛亂に氣を腐らしたアンティオコス四世が新局面の打開の爲に企てた一六八年春の埃及遠征は、同年六月のピドナ Pydna の和議によつてマケドニアと和して俄然東方に對する積極政策に轉じた羅馬の干涉に遭つて屈辱的な撤兵をなすの止む無きに至り、此無力振りは國內の不安を一層激發した。其結果イェルザレムもシリア軍の毀つ所となり、ヘレニズム黨は新たに舊都の南「ダビドの丘」と呼ばるゝアクラ Acra の地に新市を築いて住んだ。續いて國王は信

仰統一令を發した。茲に爲政者の迷誤がある。卽ち、猶太國內の不安が背敎的上層階級と奉敎的下層階級との反目に在りとし、一方的に猶太敎の廢絕を圖つて治安維持を確實ならしめんとしたのであつて、其結果猶太財閥の地位を愈々シリア側に有利に導き得べしと豫期したのであらうが、下層民は此法令に敢然反抗し、反つて叛亂が誘發さるゝ事となり、猶太の產業が荒廢して、猶太財閥は其地盤を失ひ、シリア政府は期待した財源を紊さるゝに至る事は後章論及する所である。

然し、兎も角も、シリアは信仰統一令の遵守を强制して、茲に激しき迫害が起つた。勿論最も其慘禍を蒙つたのは地方住民で過越祭(すぎこし) Sabbath の安息日に律法の命ずる如く無抵抗のまゝ迫害者の刄の手に伏する者續出し、餘は山間の岩窟へ避難するか、命ぜらるゝまゝに偶像への供物を行つて、一身の安全を計つた。

三

一六七年夏、引續く迫害は遂にモデイン Modein の小村に於ける老祭司ハスモネア家のマタティアス Mattathias の義擧を惹起した。夫は決して準備された陰謀ではなくて、突發した公憤が投じた波紋である。

マタティアス自身がハシディムであつたか否かは不明であるが、其言動は少くともハシディム的であり、爾來ユダスの死に至る迄の叛亂の第一期は、ハシディムの精神の顯現と見らるゝ行動に滿ちて

ゐる。マカベウス第壹書(二ノ四二)は、『律法の爲には身命を惜しまざるイスラエル中の勇士たるハシディムの徒』の加擔を特記して、之をマタティアス及び其近親友人が安息日に於ける抵抗の正當なる事を決議して迫害者に對する積極的な抵抗を開始せんとした時の事としてゐるが、其以前、迫害を避けて山間に逃れた信徒等が安息日に『何等の抵抗もなさず、石も投げず、隱家の道も塞がず、「我等盡く罪なくして死せん。』と言つて、(二ノ三六—三七)(註八)殺されて行く所に既にハシディムの感化を見る事が出來る。E. BEVAN. も論じて居る如く、此時代の猶太文學を特長付けるものは殉教の讃美であつて、之は非常時の猶太が生んだ新しき思想であり、猶太教が後世基督教に傳へた貴重な遺產の一つであるが、ハシディムの思想に於ける現世厭離來世欣求の精神なくしては生れ難い。

ハシディムの參加は叛徒の今後の行動を決定的に律法主義の支配の下に置く事となり、叛亂は『律法及び團結の爲』の戰となる。マカベウスの亂は、一般に、最初から宗教鬪爭と政治的一揆の合流で後に兩派の利害が喰違ひを生じて、ユダスとハシディムの分離(後述參照)を生じた樣に說かれてゐるが、少くともユダスの死に至る迄の叛亂は——假令不純な分子の無定見な混入は認めらるゝにせよ——統率者たるマタティアス及びユダスもハシディムも全く律法による猶太人社會の確立を欲求するもので、後の所謂分離なる事件も、結局此目的に對する手段の選び方と、將來への見識の相違に在つたのであつて、マカベウスの人々が始めより政治的野心或は社會的欲望に動いたと見るのは妥當でない

と信ずる。此事は後に一層詳しく考察するであらう。

彼等の最初の行動は、異邦人の祭壇の破壞と、未割禮の小兒の强制割禮とであつた。此間政府當局側で如何なる處置を講じつゝあつたか明瞭でない。叛起後數ヶ月にしてマタティアス病死し、其子ユダスが代つて總指揮者となつた。彼は天才的な戰術家であり、(註九)其軍事行動は他の諸條件に惠まれつゝ着々成功した。この軍事的成果に就ては後章に述べる事として、本章には、ユダスが此行動を如何に律法に則らせ、又如何に律法的な目的へと導いたかを觀やうと思ふ。

ユダスは、一六六年のエンマウス Emmaus の大勝の前に、部下を太祖サムエル Samuel 戰勝の古蹟ミズペー Mizpeh（マスファ Maspha）に集め、古式に從つて祈禱をなし、部下をして斷食し毛衣を着し、頭に灰を振り掛けて、神の祐助と慈悲を懇願せしめ、然る後に、喇叭を吹奏し大聲に叱呼し、全軍を分つて千人隊・百人隊・十人隊となし、家を建築中の者、葡萄畑を培ひつゝある者、惧るゝ者を己が家へ歸らしめた。之、盡く律法の命ずる所である。(註十)

以上の如き律法主義的行動は結局信仰自由の擁護以上には出でなかつたが、意外な戰勝の連續は叛徒をして天祐を確信せしめ、かねてハシディムの鼓吹する所であつたメシアの到來が間近き事を希望せしむるに至り、從來の無方針な鬪爭は茲に新しき發展を示して、メシア王國への準備が急がれる事となつた。

此事は一六五年秋のベッスラ Bethsura に於ける快捷以後に頓に顯著となり、土民は地方小都市の異教者に對する破壞行爲を止めて、舊イェルザレムの地に上り廢墟の中より祭壇を再建し神都復興に努め、然る後に軍勢を分つて、ガリレア Galilaea 及びヨルダンの東ギレアド Gilead（ガラアド Galaad）の地を征略して異邦人の間に住む猶太人の歸國を圖つた。卽ち此征略は單なる異教徒膺懲や掠奪を目的とするものではなく、同胞を神都に集中してメシアの到來を待たしめんとする爲である。ガリレアを攻めたシモンの軍は、『ガリレア及びアルバッタ Arbatta に在つた者を其妻子財產と共に集め、大いなる喜びを以て猶太へ連れ戻つた。（マカベ壹書五ノ二三）』又、ギレアドを席捲したユダス及びヨナタン Jonathan の軍は、『ギレアドの地に在るイスラエルの民を、いと大いなる者よりいと小さき者に至る迄その妻子及び財產と共に、猶太の地に還るべく集合せしめた。（同、五ノ四五）』之をヨナタンの叛亂以後の邊境攻略が同胞救護よりも寧ろ領土の擴張に在つた事と比するならば、此時期に於ける叛徒の意氣を察する事を得やう。

異境より救出された猶太人の收容によつて復興したばかりの聖都の人口が俄かに激增した結果、一六三年大擧來襲したシリア攝政リジアス Lysias の軍が聖都を包圍した時、ユダスの軍は『「第七年」であつた爲と異邦人の許から猶太へ避難して來てゐた人々が穀倉の貯藏を喰盡した爲に（同、六ノ五三—五四）』餓えに堪へずして逃亡する者が多かつた。

右に引用した一節の中にある「第七年」Sabbatic year とは利未記第二十五章に命ずる聖年法の規定による農耕休止の年であるが、民族的存亡の秋に當つて、最も重大な食糧の補給の用意を怠つてまで律法の命令を嚴守したのもハシディム的な熱情の顯現と見得るのではあるまいか。

扨、右掲の一節には亦、餓死の惧れから逃亡した怯懦の徒輩の存在が物語られてゐるが、此事はユダスの徒黨の中に現世的な欲望から參集した不純分子が漸次加はりつゝあつた事を示す。之を一層明白に立證する事實は、之より曩ユダスの軍がイェルザレムの南方イドゥメア Idumea 人の地を討つた時、戰後、味方の死屍を檢して、律法の禁じて居るヤムニア Jamnia の護符を佩用せる者あるを發見して、人々は此不信仰の徒の贖罪の爲に祈禱と獻祭とを行つたと錄されてゐる事である。（註十一）（マカベ貳書十二ノ三九）何故かゝる不純分子が加はつたか？　其は言ふ迄も無く、ユダスの軍の勝利が齎らす物質的利得、卽ち鹵獲品や徵集品が貧窮に惱む土民を誘惑して、從軍の實利に趨らしめた結果に外ならない。

ユダスの軍は、叛起の當初は一千人、エンマウスの戰の際は三千、翌年リジアスの第一回侵入の際は一萬　シモンがガリレア征伐に引率した兵は三千の精兵で、同時にギレアデへ進發したユダス及びヨナタンの兵は八千で、留守を委ねられたヨゼフス及びアザリアス Azarias の手に殘つた兵數は二千以上、一六四年のリジアスの第二回の侵寇を迎へた時の猶太軍の兵力は恐らく一層增加して居り、步兵十萬騎兵二萬と誇張さるゝシリア軍に對し相當の抵抗を試み得る程になつてゐた事と考へられる。

上記の數字が必ずしも信用すべき實數ではないにせよ、一勝利毎にユダスの兵力の激增した事は推察するに難くない。後にユダスがアダサAdasaに於いてシリアの將ニカノルNicanorと決戰を試みた際戰鬪前の彼の手兵は僅々三千(註十二)に過ぎなかつたが、彼等の死物狂ひの奮戰の結果ニカノル戰歿し、シリア軍が總崩れとなつて退却し始むるや、ユダスは喇叭を吹奏せしめて近隣の村々に戰勝を傳へ、之を聽いた土民は夫々得物を手にして出で來り、勝誇るユダスの軍に加勢して逃ぐる敵兵を追擊し、實に九千を殺戮した。(フラヴイウス・ヨゼフス、猶太古史十二卷十ノ五。マカベ壹、七ノ四六)個々の戰鬪の勝敗がユダスの軍の勢力の消長に重大な影響の存した事が認めらるゝだけに、それだけ奇蹟的な連勝に惠まれたユダスの軍の急激な增大は功利的な俗輩の漸次多數となりし事を想像されるのである。從つて、形勢一度不利となるや、困苦と脅威に堪へずして逃亡脫走する者も多い譯であつて、茲に後章に說くユダス戰勝の個々の吟味の意義も在る。

而もユダスの宗敎運動の成功には是非共多數の兵力が必要であつたのであつて、到底熱狂的な敬虔派の少數の團結のみによつては目的を達成する事は望み得ない。唯、敬虔派以外の徒をして多少なりとも、物質的功利心以外に此運動に參加する事を理由あらしめたものありとすれば、夫はメシア王國への希望である。而も彼等にとつてのメシア王國は矢張り現世的利得と安易に滿ちた社會の確立を意味するもので、決してハシディムの說く如く、忍苦して期限なき將來を待望する程の熱意の對照ではな

かつた。されば近しと敎へられたメシアは到らず、戰況もユダス側の不利を示すに至つて結束は紊れメシアへの希望も動搖を始めたのである。

之がユダスの不幸なる末路を齎すものであつて、統率者たるユダスとしては、ハシディムの熱狂を統制する一面、俗輩の團結力を宗敎運動の完成に利用すべく、少なからぬ苦慮を要した事であらう。この宗敎的目的への手段として不純分子の參與を認容せざるを得なかつたユダスの行動を以て、反つて政治的獨立達成の爲にハシディムの宗敎運動を利用したと考へるのは當を得ざるものと信ずる。ユダスは其功業が物語る如く天才的武人であつたと共に、政治家としての手腕にも乏しくなかつた。然し彼に於ては政治は神の選民が異敎の脅威を脱して安全なる律法的存立を維持する事を理想とするもので、決して個人主義的な專制王國の實現に在るのではなく、政治と宗敎は矛盾なく彼の裡に結ばれてゐた。然るに救治し難き矛盾は寧ろハシディムの律法主義的理想の中から生れた。夫は正統なる祭司族アアロン家に屬するアルキムス Alcimus（エリアキム Eliakim）を迎ふるといふ事であつた。

第二回のリジアスの侵寇の結末として猶太は一時平和を得たが、ユダス派の優越は數年來の擾亂によつて國外に避難して居たヘレニズム派にとつては默視し難きものであつたが故に、先づ、當時かの劇的な羅馬脱走によつてシリアへ歸國し、人質の身から一躍シリア王位に卽いたデメトリウス Demetrius を動かして、アンティオキアに於て亡命中の前記アルキムスを祭司長に任命し、將軍バッキデス

Bacchides の率ゆる軍隊護衛の下に猶太の地へ入り來り、ユダス等に平和なる了解を要求した。之に對してユダスは、アルキムス等の誠意を信せず、シリアの支持を背後に有する祭司長の復位を以て、猶太教に對する最も怖るべき脅威と考へた。然るにハシディムの人々は、今や彼等の理想のまゝに成就し行くかに見ゆる猶太人の律法主義的生活に、その支配者として、矢張律法の命ずるアアロン家の出身者を推戴せざる事は、畫龍點睛を缺くの憾みが在つたのであらう。彼等は相謀つてアルキムスの許へ代表者六十名を送つて歸服の意を表したが、アルキムスは不信にも彼等を捕へて盡く之を刑戮した。ハシディムのこの行爲は、一般にハシディムとユダスとの離反として解せられ、(註十三)ユダスの勢力が今後頓に振はざるに至つた原因をハシディムの支持を失つた爲と觀る論者が少くないが、ハシディムが代表者をアルキムスの許へ派した事は何等殊更にユダスの意志を無視した譯でもなく、ユダス等を見棄てゝ單獨媾和の擧に出でたのでもなく、寧ろ可及的に干戈の沙汰を避けて治安の恢復を促がし、律法の鬪士と正統祭司長との共存を計るべく、先づアルキムスの意を迎へて調停の實を擧げんと試みたのだと解すべきであらう。

此事件の後ユダスが頓に振はざるに至つた原因は、ハシディムの支持を失つた爲と言ふよりも、反つて、ハシディム等が祭司長に裏切られて其首腦者を失つた失態が民衆のハシディムに對する信頼を動搖せしめ、律法主義的理想の幻滅を味はしめ、其結果ユダス等の運動から脫退して當局の威嚇に屈

するに至らしめたに在ると說くべきであらう。此事件後ハシディムの名が突如文獻から消失するが、夫は首腦者を失つて團體的勢力が急激に衰へた爲で、ユダスの運動から離脫した爲であるとは考へ得ないのである。

かく、ユダスの徒黨の內部的分裂を招來した原因が、ハシディム側に於けるメシア近しの過信と、俗輩流の功利的な追隨とに在つたと見得るとするならば、斯る迷誤を生せしめた最初の理由である所のユダスの軍の驚異的な戰勝を檢討する事は決して無意義ではないと信ずる。

四

ユダスの死後の事であるが、一四七年シリアの將アポロニウス Apollonius は、當時祭司長たりしヨナタンに挑戰狀を發し、『平野へ出て來て一戰せよ。此處には石も礫も、又隱れるべき窟も無いぞ。』と揶揄した。(註十四) 之は猶太人が飛道具として投げる石も、神出鬼沒の活動を可能ならしめる岩山も無い平野へ來れば、猶太の山地で戰つてゐる時の樣には勝てぬだらうと言ふ意味であるが、實際此諷刺は相當の眞理を持つてゐるのであつて、ユダスの戰勝に就ても大いに妥當する所である。

叛起の始め、サマリアから來襲したシリアの將アポロニウス(上記の人物とは同名異人)と戰つたが之を破るを得て、『ユダスはアポロニウスの劍を奪ひ生涯之を佩用した。(マカベ壹書三ノ十二)』總大將すら猶ほ此の如くならば部下の武裝の不完全なりし事推して知るべく、次にエンマウスに於いて敵將ゴルギアス

の陣に急襲を試みた際率ゐた三千の兵は『甲も劒も持つてゐなかつた。(同四ノ六)』と錄されてゐるのも强ち修辭上の誇張のみではなかつたであらう。然らば何を武器としたか？　其は恐らく石であつたらう。ダビド David 王の故事にも見らるゝ如く、又、猶太に石打ちの死刑法があるによつても知らるゝ如く、猶太人の間には石で人を殺す事は普通に行はれてゐたと見るべく、從つて戰鬪に於ても石を以て武器に代へる手並を發揮した事と想像される。

斯る怪し氣な武裝にも關らず、常に優勢なシリア軍を擊破し得た原因は、第一に前記挑戰狀にも諷示さるゝ天惠の要害を利用し得た事である。「アリステアス書簡」の一節に、『此國(猶太)は自然の障壁に繞らされ、攻むるに難く、聳え立つ斷崖と深き谷とを持つ狹き路と、全地方を圍む山地の險岨なる地形とは大軍の來襲を不可能ならしむ。(一一八—一九)』とある如く、何れの方面よりするも軍隊の行進は決して容易でなく、自由なる活動は妨げらるゝが故に、地勢に馴れた猶太人が天嶮に據つて敏捷なる强襲を試みるならば、平地の戰鬪に馴れたシリア軍は到底其實力を發揮する事を得ないのである。

殊にシリア軍が猶太內部へ急行する際當然採るべき順路は、地中海岸フィリステア Philistea の平原より今日のシェフェラ Shephelah 臺地を經て、イェルザレムを周る中央高原に至るもので、就中ヨッパ Joppa (Joppe, Japha) ガザラ Gazara (Gezer) イェルザレムを結ぶ幹線道路か、略々之と並行しつゝ稍其北方を走るベツホロン Bethhoron 越が最も捷徑であるが、此等の路が臺地地帶より高原へ入る

境界の邊りは勾配殊に急峻で、此地點に位置するガザラ、ベツホロンは天然の堅壘であつて、太祖ヨシュア Joshua 及びダビド王の先住民討伐の傳說に徵するも、或は中世の第三次十字軍の聖地侵略の戰史を見るも、攻め上る者は常に不利な戰鬪を交へてゐる。(註十五)

既に述べた如くユダスは天才的な軍略家であつて、恐らく地形の利用に就ては豫め深き觀察を怠らなかつた事と思はれ、叛起の始め、サマリア總督アポロニウスの軍迫ると聞くや、太祖ヨシュアの古戰場ベツホロンの阪道に據つて之を擊破し、翌年ゴルギアスの大軍が前記ガザラ經由の大道を進み來るや――ガザラで戰ふ事は避けたが――エンマウス附近の谿谷に待ち設けて奇襲を以て之を潰走せしめ、ガザラまで急追して其戰勝を確保した。(註十六)

されば、次のリジアス引率の討伐軍は進路を變更し、殊更に南方へ大迂回を試み、當時猶太人とは敵對關係に在つたイドゥメア Idumea 族の地に入り、イエルザレムの南方の猶太第一の高地たるヘブロンの高原を占領し、イエルザレムよりヘブロンに至る道を扼するベツスラの要害を先取し、又此際の討伐軍の編成には特に騎兵を減じて居り、(註十七)豫め山地戰に備ふる所があつた。結局之も失敗したが、リジアスはアンティオキアへ戻るや『傭兵を新募して、一層の大軍を以て猶太を侵さんと試みた、(マカベ壹書四ノ三五)』と言はれて居るが、之は恐らく、山地戰の經驗に鑑み、山地に馴れたトラキア人、キリキア人等の輕裝兵を集めた事を示すものではあるまいか。(註十八)翌年ユダスの軍が再びイドゥメアに於て總督

ゴルギアスと戰つた時、ゴルギアスの麾下にトラキア騎兵の居た事が物語られてゐる（マカベ武書十二ノ三五）。然し、ユダス側でもイドゥメアの地の戰略的重要さを悟り、ゴルギアスの軍を同地より驅逐して後は、ベツスラの防備を嚴にしてシリア軍の再襲に備へた。

次に、ユダスの戰勝を可能ならしめたものは、猶太軍とシリア軍との士氣の相違である。F. BEVAN はシリア軍の慘敗を以てユダス側の宗教的熱情の旺盛なりし結果とし、一八八一年スダンに於けるマーディ Mahdi の叛亂の際優勢なる英軍が少なからず苦戰した事を引例してゐるが、吾人は更に島原叛徒の頑强なる抵抗による幕府側の苦慮にも同樣の場合を學び得る。ユダス及び其徒黨は戰鬪に先立ち常に祈禱しユダス亦極めて敬虔な言辭を用ひて部下を訓戒激勵して居る。そして斯る宗教的信念が一勝毎に强められて行つた事は前章既に之を述べた。

之に對してシリア側には大いなる油斷と、叛徒に對する輕侮があつた。殊に、ゴルギアスの軍が多數の捕虜を獲得し得べき事を豫想し、多數の奴隷商人を從軍せしめ、戰勝つて猶太人を捕へ得たならば、之を金銀に代へて、シリアが羅馬に支拂ふべき年金の資を調達しやうと試みた如きは、其戰意の如何に不眞面目であり、必勝を夢想したかを物語る好個の一例である。

斯る士氣の相違に加へて、實際シリア側に於ては內外諸般の事情に妨げられて、猶太討伐に徹底的努力を拂ひ得なかつた。例へば、一六三年攝政リジアスが步兵十萬騎兵二萬軍象三十二頭（註十九）と註せらる

る大軍を以て、矢張り前回通り進路をイドゥメア高原に選び、萬全を期して猶太に侵入し、遂にユダスの軍をイェルザレムに包圍し、城内糧食絶えて、叛徒の命旦夕に迫るを思はせた時、前王アンティオクス四世と共に東方征伐に赴いて居た將軍イリッポスが大軍を率ゐてアンティオキアに歸還し、前王の遺詔によると稱して政權を握つたとの急報が到つたので、俄かに回軍の止むなきに至りユダス等と妥協して之に信仰自由の認許を與へたのである。もしフィリッポスの歸國なかりせば、此時がユダス等の最後であつたかも知れぬ。

又、ユダスの功業の最後を飾るアダサ Adasa に於ける大勝（一六一年三月十三日）(註二〇)は、猶太人が其後毎年記念日に戰勝祭を行つたと傳へらるゝ程の成功として錄されて居るが此際のシリアの將ニカノルの軍は戰略的にも戰術的にも決して好條件を惠まれてゐたとは言ひ得ない。(註二一)卽ち當時シリア軍の主力はバビロニアに叛起した總督ティマルコス Timarchos 討伐に赴いて居り、ニカノルの手兵の一部すら之が爲に割くの止む無きに至つた程で、三萬五千以上と誇稱せらるゝニカノルの討伐軍は傭兵や新募兵の寄集めで强制徵募による猶太人も多數加はつてゐた。從つてニカノルとしてはなるべく尋常の勝負を避けて、卑怯なる奸計と高壓的な威嚇とを以て目的を遂げんとし、或はユダスと會見して平和的談合を進めん事を提議し、(註二二)或はシオンの祭司長老を脅喝し、或は敬虔なるラジス Razis なる人を殺害する等、非道惡辣なる手段を弄した爲、反つて猶太人は益々ユダス側に同情する樣になつた。愈々ユ

ダスの軍を襲擊するに當つても殊更に安息日を選び、叛徒の虛を衝かんと企てたが、之はシリア軍中に在つた猶太人の切願によつて妨げられた。戰の直前、『シリアの軍隊が彼（ニカノル）の許へ來り會した』とマカベウス第壹書（七ノ三六）は傳へてゐるが、其結集地は嘗てアポロニウスの敗死したベツホロンの險路であり、ユダスの軍は一層高い位置に在るアダサに陣を張つて、西より攻め上るシリア軍を邀へたのである。斯くて得られたユダスの大勝が猶太人を狂喜せしめた所以は畢竟ニカノルに對する人民の憎惡の深かりし事にも存すると言ふべきであらう。

アダサの戰の翌年、ユダスは遂に敗死する。此時はバビロニアの叛亂は既に鎭定して居り、將軍バッキデスはシリアの主力「右軍」（註二三）の步兵二萬騎兵二千を以て猶太討伐に進發したのである。之に對してユダスの軍は始め三千の兵數を持つてゐたが、愈々シリアの大軍と對峙するや逃亡者續出して、殘る者僅かに八百に過ぎなかつた。『ユダスは己が軍の散亡するを見るや深く困惑した。何故ならば最早彼等を集めて居る暇はないからである。そして彼は落膽した。（マカベ壹書九ノ七）』戰前よりユダスの軍は士氣大いに沮喪した。一旦退却して再擧を圖らうと主張する者が多かつた。然しユダスは寧ろ祖國の爲に斃るゝ事を潔しとして敢然前進を決した。シリアの軍は――恐らく豫め地形を選擇して（註二四）――最も愼重な編隊振を示し、ファランクスを二隊に分ち、前面には矢張り二隊に分れた騎兵を、更に最前線には投石手及び弓手の一隊を置いた。之は當時のヘレニズム國家の王師の戰に於ける正常の配備（註二五）であつて、

如何に此度こそはシリア側も油斷なく必勝を期したかゞ知られる。シリア政府としては今や東方の不安が除かれた際、久しき懸案たりし猶太平定を一擧に遂行しやうと欲したのは當然であらうが、かくも大規模の討伐隊を以て急遽ユダス黨の剪除を圖つた理由は、ユダスがニカノルに勝つた後使者を『常に萬民の福祉を圖る』羅馬元老院へ派して、盟邦として猶太を援助せん事を乞はしめて居たので、羅馬が猶太問題に干渉せざる間に一刻も早くユダスの運動を鎭壓せしめる必要があつたからであると解せられる。(註二六)

戰鬪開始さるゝや、ユダスは到底衆寡敵せざるを察し、バッキデス及び其主力が右翼に在る事を推知し、手兵を提げて其部分へ突擊し、密集部隊に對する各個擊破の戰法を試みて、天晴れ戰術家としての天才を發揮したが、之を望見した敵の左翼の來援に遭ひ、遂に亂戰の裡に落命し、其殘黨は四散した。

かく考ふるならば、ユダスの成功は彼自身の才能と部下の宗教的熱情に基づく事勿論ではあるが、天然の賦與する軍事的條件と、シリア側を牽制した內外の事情に幸せらるゝ所も亦大なりし事を見るべく、例へばペッスラに於けるリジアスに對する戰勝に就いてマカベウス第貳書の著者が白衣の騎士の姿したる天使の出現を敘述してゐるのも、結局ユダスの戰勝が奇蹟的な偶發條件に惠まれた事の象徵と言ひ得やう。

五

以上二章に亘つて、吾人は主としてユダス及び其徒黨の行動と其性質を考察したが、以下更に此叛亂の齎らした全般的影響を述べなければならない。

始めに論じた如く、此叛亂の指導的精神となつたものは、ヘレニズムの流行の反動としての律法的社會の確立の理想であるが、而も之を釀成したハシディム的倫理觀は富者權門を罪人と見る事によつて階級的對立意識を強めた事が考へ得らるゝならば、叛亂の進展と共に背敎者を多く含む上層階級が非常なる脅威を蒙つた事は當然であつたらうが、實際に於てユダスの行動がさまで積極的に上層階級の追伐に努めたと言ふ點は認め得ない。ガリレアやギレアドの異邦人の地に遠征して此等の地に散在する猶太人を救出するに急であつた時すら、復興した神都イェルザレムの直ぐ南に隣接するヘレニズム的都市アクラには一指をも染めなかつた。アクラを攻略する實力が無かつたからだとは考へられない。そして反つてアクラの住民が屢々イェルザレムの良民に危害を加へるので、遂に起つて之を攻圍した。辛うじて逃れ出したアクラの住民は國王の許へ走り、『彼等（ユダスの徒）は我等を見付け次第殺害し持てる者を奪ふ（マカベ壹書六ノ二四）。』と訴へた。その結果がリジアスの第二回の討伐となつたのである。

ユダス側としては背敎徒から隔絶して、彼等の理想とする律法主義的生活の維持さへ保證さるゝならば、敢て背敎徒の存在は問ふ所ではなかつたのであらうが、從來下層民よりの誅求によつて其生活

を保つて來た上層階級は打續く叛亂の齎す產業の疲弊に耐へずして、叛徒の壓服を欲したのであらう。そして、從來の通り此が實行にシリアの武力を賴つたのであらうが、シリア側の對猶太策は其時既に變化を生じつゝあつた。

夫は、リジアスが猶太財閥の頭目であつた前祭司長メネラウスを、『總ての禍の源である』と認めて死刑に處した事に示されてゐる。卽ちシリア當局は、國內の不安と財政の窮乏に惱みつゝある折柄、又しても、猶太に於るユダス派と背敎徒との爭ひの爲新たなる派兵と軍費とを要し、加ふるに猶太に於けるシリア軍の駐屯地アクラの存立さへ危ぶまるゝに至つて、夫が結局猶太財閥に對する過度の保護が彼等を增長せしめた結果であり、而も本國に於ける經濟的地盤を失つた猶太財閥に對しては最早援助を與ふる必要も無き事を悟り、寧ろ此機會に猶太內部の治安を徹底的に回復し、其軍事的・經濟的效用を充分に發揮する如き土地たらしめんと欲したのである。リジアスが大軍を用意して猶太征討の萬全を期した所以も亦此處に在る。されば、リジアは若し此討伐が成功すれば、『イェルザレムを希臘人の住民とし、神殿（勿論異敎的偶像を祀る積であつたらうが）に年金を課し、祭司長職を毎年賣る樣に定める（マカベ武書十一ノ二）』（註二七）計畫であつた。そして遂にイェルザレムを包圍し得たが回軍の止むなきに至つた事既述の如くであるが、ユダス等の信仰自由を認める一方、正統祭司長の家柄の出身アルキムスをイェルザレムに留めた。之は、猶太人の感情を安定させると共に、シリア自身の爲にも利用し得る爲であ

つた事勿論であらう。

然し、右に述べた如きシリア側の政策の變化は、從來シリアを信頼してゐた猶太上層階級に新たなる自覺を與へざるを得なかつた。彼等は最早シリアの援助に依頼するよりは、專ら時局の安定を計つて猶太の產業を復興せしめ、彼等の經濟活動を更新する事が焦眉の急務である。徒に良民を壓迫する事の非を悟つた。そして、一方に於てハシディム的な信仰に幻滅を感じた民衆も既に戰亂に飽きて荒廢した農村の復活を希望し始めた。かくて人々の昂奮より醒めて、冷靜な反靜を持つ機會が與へられ狂言的な異邦文物への憎惡が薄らぐと共に、無思慮なヘレニズム崇拜の熱も冷めて行つた。

而も大衆の團結の强さを經驗し、同時にシリアの無力を學び得た。

斯る尊い敎訓を遺して居り乍ら、ユダスの叛亂は一般の同情を失つて行つた。リジアスが引揚げた翌年、ユダス等は、シリア政府がデメトリウスの歸國によつて大動搖を生じて居る間に、祭司長アルキムスを驅逐してイェルザレムを奪還せんとしたが、アルキムスはデメトリウスに訴願し、バッキデスの武力に援けられてイェルザレムに還り、ユダスは間も無く敗死する。之に對して、アルキムスは尙ほ一年程存命して、アクラに於けるシリア軍支持の下に祭司長の職權を行使したが、彼の死後、祭司長職はヨナタンが一五三年之を僭稱する空位の儘に置かれたのは、民心が如何に祭司長職に對する尊敬も關心も抱かなくなつてゐたかを示すものと言へやう。(註二八)

斯る情勢に伴つて漸次強められて行つたのは民族意識である。之はハシディム的な神國建設の理想に刺戟され、旁々新たに開けた世界の情勢に對する展望によつて助成されたもので、さなきだに緩和されつゝあつた貴賤貧富間の階級的反感を弱めて、兩者の提携を促す力となつた。そして外國の支配に對する國民的反抗心が昂まり獨立への希望が燃え始めた。

茲に於て、猶太人の記憶の中に新しき姿を以て甦つて來たものはユダス及び其徒黨の英雄的行爲であつて、信仰擁護者として宗教的社會改革者として尊い血を流したユダスは、今や猶太民族の愛國的偶像として新たなる敬慕の的となり始めた。此愛慕は當然の人情として、當時尙ほヨルダン河畔に遁入してシリア側の執拗なる追討の手に逐はれつゝあつたユダスの殘黨、卽ちその弟ヨナタン及びシモンを迎ふる心となり、斯て一時忘れられやうとしたマカベウス家の叛亂は新たなる目的を以て繼續さるゝ事となつたのである。

ヨナタンに假令ユダスに優る手腕ありとするも、僅々八百の兵を擁するに過ぎずして敗死したユダスの後を受けて、約三年の後(一五七年)遂にシリア軍を擊破し、『判官として人民を治め始める(マカベ壹書九三ノ七)』に至り得た所以は、斯る人心の推移を考ふる事によつて始めて首肯さるゝものと言はねばならない。そして、一五三年シリア政權の競爭者デメトリオス一世及びアレクサンドロス・バラスAlexandros Balasが交々彼に媚を送つて盟友としての誼を求めたのは、彼の猶太に於ける主權が早くも安固た

るものであつた事を立證するものである。

× × ×

要之、ユダスは、久しき鎖國狀態を脱した猶太が異邦文明を接受した結果生じた社會的宗教的變革期の過渡期の存在として現れ、遂に其現實と相容れざる理想と共に滅び去つたのであるが、而も彼の生涯に於ける輝かしき英雄的行爲が猶太人の肝に深く銘ずる所となり、結局彼自身の理想とは反するヘレニズム的なハスモネア王朝創業の隅石となつた事は、ユダスの功業亦空しからずと言ふべきであらうか。(完)

註

一 Josephus, Antiq. XI, 7, 2. に據れば、既に波斯大王ダリウス三世の時サマリア族出身のサマリア知事サンバラットSanballatが祭司長ヨハネスの弟に其息女を配して居り、ibid. XII, 4, 2. はトビア家のヨゼフの母は祭司長オニアスの妹であると述べてゐる。

二 ダニエル書、九ノ二六)は彼をメシアと呼び、マカベウス貳書は彼の聖德により聖都が平和であつたと讃へてゐる。Meyer: Ursprung u. Anfänge des Christentums, II, S. 147. 參照。

三 此者は埃及王プトレマイオス三世の世に埃及の猶太徵稅吏に任ぜられ二十二年間在任して自らも富と權勢を獲得すると共に、『猶太人を貧窮と苦境から輝かしい生活へ導いた。(Joseph: op. cit. XII, 4, 10.)』

四 アンテイオコス四世がイエルザレム聖殿の神寶を奪はしめた時、神殿にはトビア家のヒルカノス(ヨゼフの子)の寄託物たる銀四百タレント金二百タレントが在つた。(マカベ貳書三ノ十一)

五　本論の譯文は Charles: Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament (1913), Vol. II, 收錄の英譯に據る。此文書の著作年代は Schürer の二〇〇年以前説、Holtzmann の二世紀中葉説、Wendland の一世紀初頭説、Graetz, Willrich の紀元後三三年以後説等紛々として定まらない。Charles, は折衷説を採り少部分の後期の追加を認め、大部分はハスモネア期末期の作と假定しやうとしてゐる。

六　Book of Jubillee, XXIII, 18. Meyer (op. cit. II7, a. 2) は此文句を律法の爲の鬪爭が人民の下層より起つた事を示すものと見てゐる。

七　イエルザレムの Sanhedrin (Gerusia) の代表者である。Sanhedrin は聖職者に限らず在俗者も出席し、宗教問題のみならず政治問題をも取扱ふ議政機關で、ハシデイムも存在した。cf. Herford, The Pharisees, p. 24ff.

八　E. Bevan; House of Seleucus, II, p. 174f.

九　マタテイアスが臨終の遺戒にも、『汝等の兄弟シモンは思慮の人である。……ユダス・マカベウスは、亦、その若き時より戰ひの人である。彼は汝等の主將となり、人民の戰を戰ふであらう。(マカベ壹書一ノ六五、六六)』と言つてゐる。

十　申命記二十章五節以下。士師記七章三節。民數紀略十章九節。ユダスの軍は異邦の人都市を討つや、其地の男子を鏖殺し婦女子財貨を奪つて居る。又籙め投降開門を勸めてゐるが(例へば Ephron 略取の前。(マカベ壹書五ノ四六以下))、此等も何れも申命記二十章十節以下の命ずる所である。

十一　何故祈つたかと言へば、死者の復活といふハシデイム的な信仰に基付く。『若し彼(ユダス)が殺されたる者が再び生くる事を希望せざりしならば、死者の爲に祈りし事は不必要な無益な事に見えたであらう。(マカベ貳書十二ノ四四)』

十二　マカベウス第壹書は三千と言ひ、(七ノ四〇)、Josephus, op. cit. XII, 10, 5. は一千足らずと言ふ

十三　Kent, Historical & Biographical Narratives (Student's Old Testament) p. 444, note. Bevan, op. cit. II, p. 199f. Meyer, op. cit. II, S. 243. Niese, Gesch. d. griech. u. makedon. Staaten, III, 255. (cf. Niese, Kritik d. beiden Makkabäerbücher, Hermes, XXXXV. S. 498) 但し Riggs, History of the Jewish People, p. 46 は多少の疑問を殘してゐるものゝ如くである。

十四　マカベ壹書、十ノ七三。

十五　Smith (G. A.), Historical Geography of the Holy Land, p. 201ff.

十六　サムエル後書五章二十五節に據れば、ダヴイド王もフイリステア人を逐つてガザラに至つて居る。

十七　ゴルギアスの軍は歩兵五千に對し「最良の」騎兵一千。リシアスの軍は選抜きの歩兵六萬に對し騎兵五千。（マカベ壹書、四ノ一及び二八）cf. Bevan, op. cit. II, p. 179, note 2.

十八　尤も傭兵の使用は、既にアポニウスの軍隊に就ても（マカベ壹、三ノ十）ゴルギアスの軍に就ても（マカベ貳、八ノ九）見られ或はリシアスの最初の侵入の時既に特に山地向の輕裝兵を多數採用して居たかも知れない。トラキア、グレタ、キリキア、リキア、パムフイリア、ピシデイア等よりの傭兵が peltast（輕裝兵）としてシリア軍隊に重きを成した（cf. Bevan, op. cit. II, p. 286f.）。後、ハスモネア王家にはキリキア人・ピシデイア人が傭兵となつた。（Josephus op. cit. 13, 5. Bell. Jud. I, 88.）

十九　之はマカベ壹書の叙述で、『他の王國及び島々よりの傭兵の諸隊』が加はつてゐた。マカベ貳書は（マカベ貳書十三ノ二）歩十一萬、騎五千三百、軍象三十二とする。Josephus, は前者と同じ。

二〇　Meyer, op. cit. II. S. 245. に據る。Cambridge Ancient History, VIII, p. 520. は一六〇年とする。Niese, op. cit. III. S. 254, a. 4. は斷定を避けてゐる。

二一　Niese, Kritik d. beiden Makkabäerbücher (Hermes, XXXV, (1900), S. 4988 ff. 參照。Meyer. op. cit. II. S. 245, a. 3. はニカノルの兵は精々二千であつたらうと推定してゐる。

二二　此事に就てマカベ壹書と同貳書の記述は相違がある。壹書は會見中ユダスが相手の奸計を看破して避難したとし、貳書は兩雄の意氣投合して一時平和が齎らされたが、シリア本國よりの命令でニカノルは再びユダスを捕へんとしたので戰爭が再開されたと傳へる。Meyer は前説に從ひ Niese, Bevan 等は後を採る。

二三　マカベ壹書九ノ一。Kent, op. cit. p. 448, note. によれば猶太人は東を向いて方向を定めるから右は南の意であると斷じ、

Meyer (op. cit. II, S. 248) も國軍中シリア地方に當てられた部隊であると解してゐる。

二四　シリア軍の正規の編隊を常石通りに配置するには相當廣濶な地域を要する。キノスケフアライに於けるマケドニア王フイリツプ五世の敗戰は其フアランクスが高低多き地形に禍されて密集を妨げられたに起因する。

二五　アンテイオコス三世の軍のラフイアに於ける (Polybios, V, 80) 及ひマグネシアに於ける (Livius, XXXXVII, 40) 配置を看よ。マグネシアに於ては投石手、投槍手、弓手等の飛道具隊が活躍してゐる。

二六　此事を以て直ちにユダスの政治的野望の顯現と言ふは當らない。Meyer (op. cit. II, S. 1) も言へる如く猶太教の律法は外國人の支配を前提として産まれたものである。されば律法的社會運動の妨害者たるシリアを牽制する爲に正義の强者と信ぜらるゝ羅馬に頼ればとて訝しむに足りない。唯吾々はヘレニズムに對抗するユダイズムの鬪手が、後にハスモネア王朝を滅すべき國敵である羅馬に手を差延べた所にヘレニズム諸國の羅馬の善意への過信てふ時代的病弊を認めねばなるまい。殊に羅馬がヘレニズム及びユダイズムに對して負ふ世界史的使命を考へる時にユダスの此行動の深き意義を惟ふ。

二七　此記事は宛もリシアスの第一回討伐の事の如く錄されてゐるが、Meyer (op. cit. II, S. 233, a. 3) は精細な説明を以て、此記事は結局同章十三章のリシアス第二回侵入の事實と同じ事が書かれてあるに過ぎない事を明かにした。

二八　Josephus, Antiq. XXX, 10, 1 に、『さて、ヤキムス(アルキムの猶太名)は三年間祭司長職を掌握して死した。そして彼を繼ぐ者なく、聖都は七年間祭司長無しに續いた。』とある。